

# 1

業組合法（中小企業等投資  
事業有限責任組合契約に関

する法律）が施行された。組合員す  
なわち投資家の責任を限定すること  
で、より広範囲の投資家から資金を  
集めてファンドを設立することがで  
きる。そのため、本格的なベンチャ  
ー支援策の一つとして期待が集まっ  
ている。

新法が施行されるやいなや、「日本  
テクノロジーベンチャーパートナー  
ズ（NTP）111号」を翌日に登  
記したが、ベンチャーキャピタリ  
スト、村口和孝氏（四〇）だ。これ  
まで組み入れた投資先はインフォテ  
リア（二二二参照）など三社、さら  
に二社ほど投資を検討中という。

村口氏が投資したいと考えている  
のは、ハイテク関連で、大企業から  
スピンアウトしたメンバーが設立し  
たベンチャー企業だ。さらに、日本  
のお家芸である技術でもって、世界  
に打って出る実力と気概のある企業  
を切望している。

もちろん、一口にハイテクといっ  
ても、その中身は千差万別。事業内  
容の将来性をどう評価するかが、ベ  
ンチャーキャピタリストの腕の見せ  
所だ。村口氏は「周囲に聞きまくる、  
資料等を見まくる、調べまくる。こ  
れに尽きる」。そうして納得した企業  
だけに、投資を行うのだ。

村口氏は一貫してベンチャーキャ  
ピタリストのキャリアを積んできた。



日本テクノロジーベンチャーパートナーズ

# 村口和孝

◆ Kazutaka Muraguchi

## 求む、技術力で世界に出る 気骨のある起業家よ

◆……………ハイテク分野では世界に通用する技術力を持つベンチャーでなければ生き残れない。  
それに加えて、どんな困難があっても事業をやり抜く情熱と根性が経営者には必要だ。



大学時代からベンチャーキャピタリストを志し、日本合同ファイナンス(現ジャフコ)に入社。バルテック(98年7月店頭公開)、松本建工(95年12月店頭公開)をはじめとして、数多くの案件を手がけてきた。キャピタルゲインは総額で一五〇億円以上になるという。そんな村口氏は、社内にあつては改革の急先鋒に立っていたという。ベンチャーキャピタル(VC)をとりまく環境変化に対する問題意識があつたからだ。

80年代は、いつ公開してもおかしくない未公開会社がたくさんある、VC業界にとって夢のような環境だつた。村口氏の言葉を借りれば、「ちよつとテコ入れてリメイクして公開に持つていけばよかった」。そうした企業に投資したジャフコの業績も絶好調だつたし、それを見て参入したほかのVCも、当然のことながらジャフコを手本とした。

しかし、ちよつとテコ入れすれば公開できるような企業を刈り取っていくスタイルでは、やがて行き詰まるのは明らかだ。

「日本にはベンチャー企業が根づかない、VCが投資できる案件がない、と言う人がいるがとんでもない。そう言っている人は『今にも公開できるオイシイ企業がない』と言っているだけ」(村口氏)

さらに、海外の動向にいつも目を向けていた村口氏が98年3月、イスラエルに視察旅行で訪れたことが、

## 村口和孝

むらぐち かずたか

### 日本テクノロジーベンチャーパートナーズ

URL=<http://www.ntvp.com/>

#### 経歴

1958年生まれ、40歳。84年慶應義塾大学経済学部卒業後、ジャフコ入社。北海道ジャフコでは松本建工等を担当、東京投資本部ではバルテック等を担当。98年4月に独立。同年7月、ベンチャー事業支援を行う株日本テクノロジーベンチャーパートナーズ(NTVP)設立。

#### 事業内容

ベンチャーキャピタリストとして98年11月に日本初の投資事業有限責任組合を設立し、その運営責任者。設立した「NTVP i-1号投資事業有限責任組合」は出資金3億3000万円。投資先には、XML専業ソフトウェアメーカーのインフォテリア(平野洋一郎社長・資本金7000万円)などがある。組合の出資者は個人とすることを特徴としており、堀場雅夫氏もその一人である。現在、2号ファンドを準備中。15年にわたるベンチャーキャピタルのキャリアと成功事例を生かし、投資から公開まで幅広く対応。ハイテク関連、大企業スピンアウト型投資に注力している。

調するがためだ。

さらに、今回のNTVP i-1号の出資者も、村口氏の趣旨に賛同した個人ばかりだ。堀場製作所会長の堀場雅夫氏も個人として出資している。そこまで村口氏が「独立個人」にこだわる理由は何か。

「法人がベンチャー企業に投資するとしましよう。しかし法人の資金は本来、株主から預かったものです。リスクの高いベンチャー投資に、株主が納得するでしょうか。ベンチャー企業への投資は、徹底した自己責任のもとで行われるのが本来の姿です。そのためにも、自己責任が貫徹される個人こそが、もつと前面に出るべきなのです」。

「日本にはベンチャー企業は根づかない」という「偏見」を打破するためにも、村口氏のようなベンチャーキャピタリストの活躍が期待されるどころだ。

村口氏が投資を判断する最も重要なポイントがある。それは「経営者の根性、ガッツ、大和魂」だ。もちろん精神論だけでは事業は成功しない。世界に通用する技術力が必要なのは当然だ。だが、そうした言葉がこぼれるのも「個人のキャピタリストでなければ将来はない」と、自らも熱い信念から独立した経歴の持ち主だからだ。他人を納得させる経営者の情熱なくして、誰がおカネを投じるだろう。村口氏は力を込めて訴える。

### 徹底解剖 99年版 これが日本の ベンチャーキャピタルだ

## 独立系キャピタリストが語る 「この会社なら投資する」



組織からの独立を促した。「私には一四年の業界経験があつたし、イスラエルのVCの歴史もそう古くない。まあ対等に話ができるだろう」と思いきや、自分よりも若いキャピタリストが、はるかに多くの経験を積んでいることに衝撃を受けたのだ。

「これまでの組織中心のVCには将来はない。これからは、組織を離れた独立個人型のキャピタリストが自分の能力を最大限に発揮して、積極的に案件を開拓していく時代だ」と、村口氏は帰国後即、辞表を提出したのだ。

以来、村口氏は肩書きのない、ただの「キャピタリスト」を名乗り続けている。それも、「独立個人」を強